

[🏠](#) [医師](#) [若手医師・医学生](#) [看護師](#) [薬剤師](#)[eディテール](#)[薬剤師TOP](#)[NEWS & REPORT](#)[連載・コラム](#)[学会カレンダー](#)[処方薬事典](#)[ダウンロード](#)[🏠](#) > [薬剤師TOP](#) > [国分秀也の「ゼロから学ぶオピオイド」](#) > [オピオイドの過量投与を考える](#)[国分秀也の「ゼロから学ぶオピオイド」](#)[⊕ 連載をフォロー](#)

オピオイドの過量投与を考える

2019/11/13

[📁 癌](#)[🔍 オピオイド](#) [過量投与](#)[🖨 印刷](#)[シェア 0](#)

0

[ツイート](#)

米国オクラホマ州地方裁判所は、2019年8月26日、鎮痛薬であるオピオイド処方を通り、米製薬大手ジョンソン・エンド・ジョンソン（J & J）に5億7200万ドル（約606億円）の制裁金を支払うように命じた。日本ではヤンセンファーマがこのグループに属する。この背景には、オピオイドの過剰投与による死亡例の増加があり（図1）、米食品医薬品局（FDA）においても、対策が講じられている。

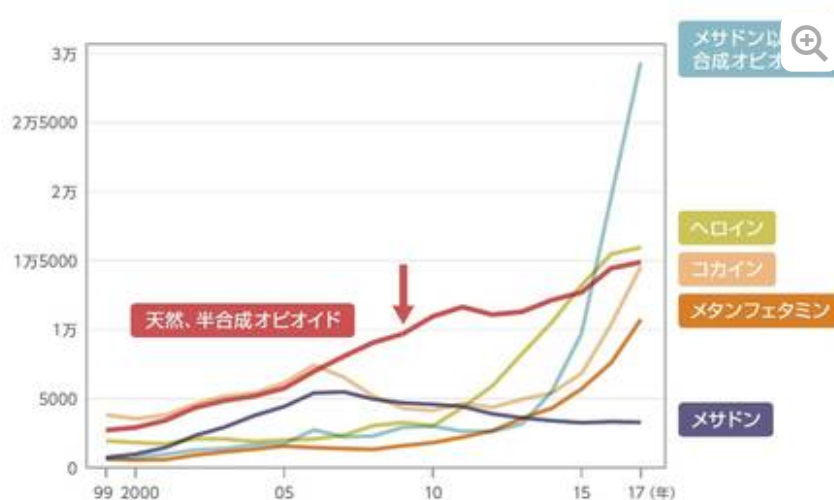


図1 米国におけるオピオイドの処方と過剰摂取による死亡者数

オピオイドは、適正に使用していれば非常に安全な薬である。私も数百例ものオピオイドを使用している患者をみてきたが、オピオイドによる死亡例は1件もない。しかし、まれに呼吸抑制を起こす症例があり、入院中であればすぐに医師が対応するため問題ないが、在宅などですぐに対応できない場合、死亡に至る可能性がある。

日本では、米国と異なりオピオイド鎮痛薬の処方量が少なく、癌疼痛患者に対して十分なオピオイド鎮痛薬が投与されていない（表1）。しかし、日本でも適正に使用されなければ、呼吸抑制を起こし、放置すれば死亡することがある。

適正用量(≥100%)	米国、カナダ、オーストラリア、ドイツ、スイスなど
中等量(30～100%)	韓国、英国、フランス、スペイン、ノルウェー、イタリアなど
低量(10～30%)	日本、ポルトガル、ポーランドなど
超低量(10%未満)	メキシコ、ブラジル、チリ、南アフリカ、サウジアラビアなど

※日本は、オピオイド適正量(100%)の10～30%しか満たしていない。反対に、米国、カナダ、オーストラリアなどは、100%以上であり、過量投与の可能性がある。
(J Pain Symptom Manage.2014;47:283-97.を改変)

表1 各国のオピオイド使用量（オピオイド適正用量を100%とした時の割合）

事実、フェンタニルパッチによる死亡例は報告されており（Am J Forensic Med Pathol.2010;31:18-21.、ヤンセンファーマのウェブサイトにも掲載）、日本でのフェンタニルパッチでの呼吸抑制症例も報告されている（ペインクリニック 2010;31:353-8.）。また、日本の医薬品副作用データベースを集計した研究において、オピオイドは他の薬剤よりも有意に呼吸抑制を引き起こすことが確認され、特にフェンタニルは、その頻度が一番多かった（表2）。

オピオイド	件数	オッズ比	95%信頼区間	p値
フェンタニル	115	8.96	7.40-10.86	<0.0001**
モルフォン	47	8.01	5.95-10.78	<0.0001**
オキシコドン	45	4.03	2.99-5.43	<0.0001**

表2 癌患者におけるオピオイドによる呼吸抑制の報告数とオッズ比

また、若年者に比べ高齢者では、モルヒネおよびフェンタニルで有意に呼吸抑制を発現することが確認された。さらに、呼吸抑制が発現する時期は、投与開始して10日目までが一番多かった(Biol Pharm Bull.2019;42:1185-91.)。同様のデータベースを用いた研究では、オピオイドによる死亡率はフェンタニルが一番高く（図2）、その原因として呼吸抑制が挙げられている（Biol Pharm Bull.2019;42:801-6.）。また、Lindsay Mらは、重篤な呼吸抑制の発現は、フェンタニルにおいて他のオピオイドよりもリスクが高いと報告している（Addiction.2018;113:59-66.）。

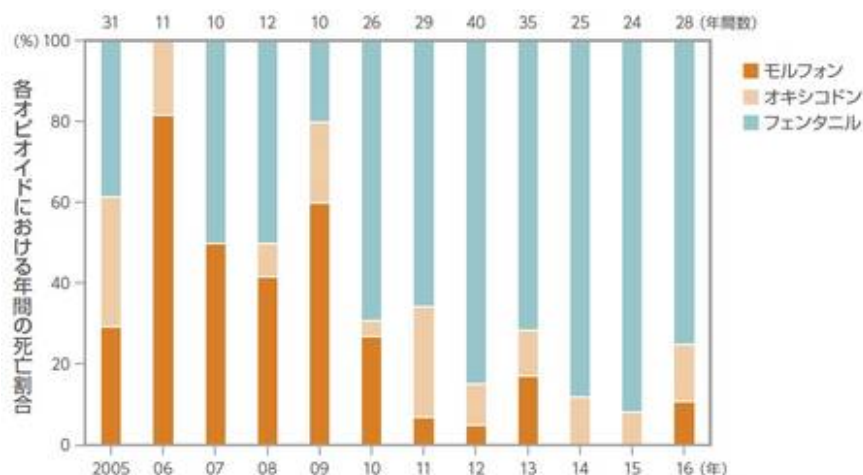


図2 各オピオイドにおける年間の死亡割合

日本では、多くの癌疼痛患者に十分なオピオイド量が投与されていない現状にある。しかし、オピオイド量をただ増やすのではなく、個々の患者に合わせたオピオイドの使い方を行い、オピオイドの注意点を患者にしっかり説明し、適正に使用してもらうことが重要であると思われる。

1

シェア 0

0

ツイート

著者プロフィール

国分秀也（東京薬科大学薬学部薬学実務実習教育センター准教授）こくぶん ひでや氏 1992年東京薬科大学薬学部卒業。同年、北里大学病院薬剤部に入職。

薬剤部課長補佐、緩和ケアチーム専任薬剤師などを経て、2017年4月から現職。薬学博士。日本医療薬学会認定がん指導薬剤師。日本緩和医療薬学会評議員、一般社団法人「がんの痛みと症状緩和に関する多施設共同臨床研究会（SCORE-G）」監事などを務める。



連載の紹介

国分秀也の「ゼロから学ぶオピオイド」

ここ数年、新たな成分や剤形のオピオイド鎮痛薬が登場し、癌性疼痛に対する緩和ケアや慢性疼痛の治療に広く用いられるようになってきました。薬剤師として知っておくべきオピオイド鎮痛薬の基本的な使い方や、注意すべき薬物相互作用、薬物動態の特性を考慮した患者指導のポイントなどを解説します。

⊕ 連載をフォロー

この連載のバックナンバー

オピオイドの過量投与を考える

2019/11/13

「WHOがん疼痛治療ガイドライン」をチェック

2019/05/23

オピオイドによるセロトニン症候群

2019/03/14

オピオイドによる便秘にナルデメジン

2019/01/30

ほんとに安全？低用量のフェンタニルパッチ

2018/09/05

➤ もっと見る

この記事を読んでいる人におすすめ